

こども特派員が行く!!

このコーナーは、小・中学校の子どもたちが自分たちで編集・発行する「特派員」となり、有田市の良さを伝えてくれます。
今回のこども特派員は、糸我小学校の大浦未佳子さん、中井芹奈さん、菅原秀美さん、間佐古愛美さん、柿本夢果さん、伊集院未帆さんです。
※紙面の文章及び掲載の写真はこども特派員によるものです。



運動場で散歩中

『田んぼの学校』の取り組みは、地域の方々や育成会の方々の世話になりながら、5年生が中心となり、一年を通じて米作りを体験する活動です。具体的には、種まき・苗とりから始まり、その後、全校児童で田植えをします。また、アイガモとアヒルを卵から育て、ふ化させ、田んぼへ放鳥します。その後、草取り・稲刈り・脱穀をし、『鴨米・美』・カモンベイビーという商品名でお米の販売のお手伝いもします。最後に『芋茶がゆと餅つき』の集いという糸我小学校で行われる地域の行事で、地域の方々にも食べてもらいます。

私たちは、『田んぼの学校』の校長先生を務める山崎佳彦さんにインタビューしました。山崎さんは、給食の残飯を見て、お米のありがたさを知ってもらいたいという願いで15年前

インタビュー

『田んぼの学校』で全校児童による田植えが行われました。心配していた雨も降らず、泥だらけになりながらも楽しみながらみんなで協力して、本本頑張って植えました。上級生が下級生に苗の植え方を教えるなど優しい場面も見られ、近所の方や保育所の子たちも応援に来て、にぎやかなひとときにつつまれました。田んぼ面に手作業で植えられた苗は頑張ったがいもあり、今年もきれいに植えられました。



今年の田植え

6月12日(金)、『田んぼの学校』で全校児童による田植えが行われました。心配していた雨も降らず、泥だらけになりながらも楽しみながらみんなで協力して、本本頑張って植えました。上級生が下級生に苗の植え方を教えるなど優しい場面も見られ、近所の方や保育所の子たちも応援に来て、にぎやかなひとときにつつまれました。田んぼ面に手作業で植えられた苗は頑張ったがいもあり、今年もきれいに植えられました。



思いを語る山崎さん

『田んぼの学校』を始め、こういった取り組みは食育だけでなく、子どもたちの1生の財産になると考えているそうです。また、6年間この活動を続けた6年生の林亮太郎君は、『泥だらけになるけど、達成感があった。楽しかった。6年間とてもやりがいがあった。』と、話してくれました。

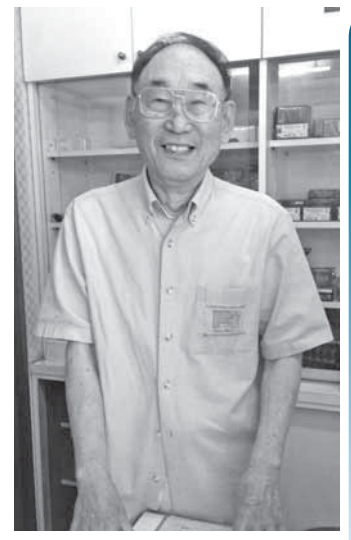
取材をして

この取り組みから、田植えで仕事の苦労がわかり、お米のありがたさを知ることができ、とても良い経験ができたと思うています。また、全校児童で行う田植えなどの体験は、他の学校では味わえない貴重なものだということもわかりました。これからも、この行事が続き、たくさんの方に仕事の大変さ、食べ物の大切さを感じてもらいながら、多くの地域の方々とも知り合いたいと思います。

広告



このコーナーは、地域の課題解決について研究している龍谷大学政策学部の学生の皆さんが取材しました。有田市でのフィールドワークなどでの活動を通じて感じた“縁側”の魅力を多くの人に伝えるため、学生自ら取材を行い、記事を書いています。今回は、箕島駅前商店街で出会った一軒のおもちゃ屋さんのご主人にお話を伺いました。
※ここでの“縁側”とは、“ホッとできる自分の居場所”という意味です。



栗野正行さん (78) 箕島在住

少年の心はいつまでも



穏やかに流れる有田川

ある晴れた日曜日、私たちはインタビューを行うために箕島方面へ向かった。箕島駅から有田川に伸びている道を歩いて商店街に入ると、趣のある一軒のおもちゃ屋さんが目に入った。そこであたたかく迎えてくれたのが店主の栗野正行さんだった。さっそく憩いの場所を尋ねてみると、栗野さんは「有田川」について話してくれた。

栗野さんは生まれも育ちも有田市で、昔は駅前広場や神社を聞かせてもらっている間、栗野さんは少年のように目を輝かせながらこの間の事のように語ってくれた。しかし、今ではその有田川で遊ぶことは危険とされているので、子どもたちが川で遊んでいる姿は見えない。昔は人や緑で賑やかな川であったため、今はな

話を聞かせてもらっている間、栗野さんは少年のように目を輝かせながらこの間の事のように語ってくれた。しかし、今ではその有田川で遊ぶことは危険とされているので、子どもたちが川で遊んでいる姿は見えない。昔は人や緑で賑やかな川であったため、今はな

社、学校の運動場でめんこやベーゴマ、柔らかいボールを使った野球をしてよく遊んでいたそうだ。その中でもお気に入りであったのは、夏の「有田川」である。友人と約束をすることもなく自然と有田川に人が集まり、川に飛び込んだりうなぎやカニ、シジミを捕まえて遊んでいた。うなぎを捕まえるにはコツがあるらしく、川の中に石を積み上げてそこに隠れたところを掴み取る。川での遊びは栗野さんの少年時代そのものであり、いつまでも色褪せない思い出になっているように感じた。



左から順に 川崎里美、清原実乃里、猪尾雪乃

栗野さんに取材する前、数名の方に声をかけましたが、皆さんとても親切に接してくださり、有田市の方々の優しさを感ずることができました。また、取材後に有田川に行ってみました。水が澄んでいてとても綺麗でした。うなぎやシジミなどは見つけられませんが、小さい魚を見ることができました。また一つ有田市の魅力を発見できた一日になりました。

そんな栗野さんは現在、週に3〜4回有田川の河川敷で体操を行っている。変わっていくこともあるが、今も昔も変わらず、有田川は栗野さんの思いが詰まった場所である。

広告

